

## 宮崎県の生活綴方教師・木村寿(六)

——井伏鱒二の「かばん調べ」評をめぐって——

菅 邦男

一、井伏鱒二と綴方「かばん調べ」(宮崎県東臼杵郡土々呂小学校) 昭和十年四月一日、雑誌『工程』(椎の木社)が創刊された。編集兼発行者は詩人の百田宗治である。その創刊号に「児童文の新採点」というコーナーが設けられていた。子どもが書いた綴り方を文学者に「採点」してもらおうというものである。創刊号では、井伏鱒二、林芙美子、福田清人が「採点」にあたっている。その最初に採り上げられたのが、宮崎県の生活綴方教師・木村寿の指導作品「かばん調べ」である。作者は宮崎県東臼杵郡土々呂小学校三年の吉井己義、批評者は井伏鱒二である。

かばん調べ

尋三 吉井己義

僕は僕たちの生とのかばんを調べました。  
らんどせるを持つてゐる人は二十六人をります。らんどせるの色は土色と黒色があります。土色は二十四人持つてゐます。黒色を持つてゐる人はたつた二人です。黒色のと、ねだんが高いからすくないのです。

らんどせるは、牛や馬のかはで作つてあります。馬のかははあつくて牛のかははうすが、牛のかはの方がつよいといひます。その

ほか、たんもんがみで作つてあるのがあります。たんもんがみの上にきれをはつてゐるのです。

らんどせるのねだんは、一円二十銭から二円五十銭ぐらひまでです。僕は調べて見てびっくりしました。あんな高いねだんのもを二十四人も持つてゐるのだがと思つたからです。僕は一円から六十銭ぐらひだ思つてゐたからです。

だかららんどせるをかつてもらつたかと調べたら、お父さんから買つてもらつた人は八人おります。ねえさんからかつてもらつた人は三人おります。このねえさんたちは、遠い所にはたらきに行つておくつてくれたのです。お母さんからかつてもらつた人は五人です。そして外の人は、しんるゐや、おみやげにもらつた人がをるのです。

僕たちのせきのらんどせるは、どこから来たかといふと、延岡で買つてもらつた人が多くて十四人ゐます。延岡は町ですから、やすいと思つて買ひに行つたのでせう。稲田君は、あぶらつかから買つておくつてもらひました。お父さんがはたらきに行つてゐたのです。土々呂で買つた人もおります。大阪から買つてもらつた人が一人おりました。みんながほんとうか、とびっくりしました。大阪のらんどせるもおなじです。そしたららのぼる君が「おれのとほ岡山」といひました。みんなは岡山はどこか知らんからぼかつとしてゐました。

秋山君は「おりのとは東京からおくつてもらつた」とみんなにをしゃてくれました。僕はせきのらんどせるが、あんなに遠い所から来てゐるかとびつくりしました。

本入りに、僕たちのせきのものはざつのうを持つてゐます。僕もざつのうです。ざつのうの色は水色と黒色です。黒色のざつのうを持つてゐる人は三人です。水色のざつのうを持つてゐる人は十八人です。ぼくのざつのうは三十五銭でした。一年の時から持つてゐます。まだ三年ごろまでは、つかはれます。ざつのうは大がい土々呂の金井や兵どうでかひます。

又本をふるしきに入れてくる人が三人あります。ふるしきに入れてくる人は、手で持つてこなければなりませんからさむいでせう。

僕は三つのうちでどれが一番いいかとかんがへます。僕は一年の時にはらんどせるがほしくてたまりませんでした。はしる時などは、手をいくらふつても、がたがたいはずにはしります。ざつのうは手でもたないとはしる事が出来ません。それでも今は、ざつのうがいいと思つてゐます。僕のざつのうは三十五銭ですが一年の時かつてもらつて、まだ三年ごろまではつかはれます。らんどせるはもうわるくなつてゐます。かけるところがぎれたりしてゐます。らんどせるは高くてもう上のせきになると、みんなざつのうばかりです。昔の人は、本を何に入れてもつて行つたかといふと、みんなふるしきにつつんで持つて行つたといふことです。本をひもでむすんでもつて行つた人もおるさうです。(宮崎県土々呂小学校 木村寿指導)

いわゆる「調べる綴方」(調べた綴方)である。「調べる綴方」とは、当時の生活綴方教師・上田庄三郎によれば、「個人の主観や印象を重んずる文芸至上主義的な綴方に対して、より客観的・科学的・

合理的・社会的な綴方」(『生活綴方事典』日本作文の会編 昭和四十三年 明治図書)である。題材も「花鳥風月や身辺雑記的なものより、広く郷土や社会のできごと」に取り、「科学的に調査し、これを合理的・客観的な表現によつてつづ」ろうとするものである。井伏鱒二は、この調べる綴方「かばん調べ」に対して、次のように述べている。

#### 綴方採点

井伏鱒二 「かばん調べ」 拝見いたしました。

井伏鱒二

何の秘密もない文章で観察にも混乱したところがすくないのは、童心のたまものであらうかと考へます。しかし私の勝手を云つてみればかういふ幼い子供の文章について、われわれ大人たちが職業的な批判を加へるのは遠慮すべきだと申し上げたい。

この綴方には延岡とか土々呂といふやうな名詞が現はれます。もうせん十年も前のことですが、私が土々呂や延岡に旅行したときには、学校の子供はランドセルなど、持つてゐなかつたやうに思ひます。ふるしきづつみを紐で結え、その紐を水筒の紐のやうに肩にかけてゐる子もありました。彼等は概ねつんつるてんの衣服を着て、小学生や中学生はいふまでもなく、町の女学生たちでさへも雨あがりの路を裸足で歩いてゐました。いまこの報告的な綴方を読んで、私は風俗流行のうつりかはりに驚きを禁じ得ないのであります。―― 私たち尋常三年生ころの目やすから採点をつけるなら、この綴方は甲の部であらうかと思ひます。

幼い子供の文章について大人が職業的な批判を加えるのは遠慮す

べきだと言っているのだが、そう考えているのなら、最初からこうした仕事を引き受けるわけもないだろうから、この綴り方「かばん調べ」を読んでそう思った、言い換えれば、読んでみて、職業的な批判を加えるべきものではないと感じたということである。井伏自身が持つ「批評対象」の概念との間に落差があったと言ってもよい。「何の秘密もない文章」「報告的な綴方」という言い方に、それが見える。「混乱」が少なく報告的な文章、それは表現技能というより「童心のたまもの」と井伏には映ったのだろう。そこに何等かの「職業的な批判」を加えれば、子どもに多大な影響を及ぼす。教師ではない井伏としては、それは避けたいということである。それに井伏の脳裡にあったのは当然従来の綴り方であり、報告的な綴り方ではなかった。したがって、この綴り方は文芸性に欠けるとの思いもあつたはずである。しかし文章はしっかりしているから「甲の部」だということであろう。

井伏は結局、なぜ「子供の文章に職業的な批判を加えるのは遠慮すべき」なのかについては触れず、十数年前に土々呂や延岡に行った時に見た子どもたちの様子に話題を転じている。土々呂の子どもたちは、つんつるてんの衣服を着て、風呂敷づつみを紐で縛って肩からさげ、裸足で歩いていて、その土々呂の子どもたちがランドセルを持っているのかと「風俗流行のうつりかはりに驚きを禁じ得ない」というのである。

井伏鱒二が宮崎に來たのは、大正九年（一九二〇）のことである。当時、井伏は早稲田大学文学部仏蘭西文学専攻科格第一学年で、二十二歳である。井伏鱒二全集別巻二（四九七頁）には、次のようにある。

「夏、日向に旅行し、折生迫海岸で級友の阿萬為之とともに一箇月近くを過ごす。『新しき村』の第二会員たちも近くで合宿生活をし

ていた。帰りは、船で瀬戸内海に入り、四国の今治高浜、備後の尾道を経由して加茂村栗根に帰省した。」

折生迫は、宮崎市の南部に位置し、「鬼の洗濯板」や密生する檳榔（びろう）で有名な「青島」に隣接する港町である。近くに青島海水浴場・白浜海水浴場がある。海水浴を楽しみながらの滞在だったのである。この時、延岡や土々呂にも足をのぼしたのか、あるいは当時大阪や四国から土々呂に入っていた航路（汽船）を利用したかしたのである。そこで見た子どもたちの様子を書いているのだが、吉井己義の綴り方にも「本をふるしきに入れてくる人が三人あります」「昔の人は、くみんなふるしきにつつんで持つて行つたといふことです。」とあるから、井伏鱒二が訪れた頃は、まさに描かれているような状況だったのだと思われる。木村寿も文集の中で、クラスの中に「雨の日も、天気の良い日も、はだして元気でくる子どもを紹介している。木村の生徒だった人たちも、多くの子どもは半草履だったと言っている。したがって、大正九年の雨の日子どもたちが裸足で通っていたとしても不思議ではない。

いづれにしろ、井伏鱒二にはこの綴り方、即ち「調べる綴方」の教育的意図が分ならず、感覚的にも違和感を感じたのである。教育的意図が分かなければ、無理もない反応である。

鹿児島県の綴方教師である磯長武雄は、同年八月に発表した「文学者の観た児童文への感想」（『工程』第一巻第五号）の中で、井伏鱒二の批評に対して「その態度は消極的で（われわれ大人たちが職業的な批判を加へるのは遠慮すべきだ）といって、甲といふ採点を付けてゐる。どういふ観点から甲といふ採点を与へられたのか明瞭でないし、又童心といふやうなものを唯一の批判の対象にしてゐられるやうな気配の見えるのも食ひ足りない気がする。かういふ批評の方法は我々にとつて得るところが甚だしい。」と批判している。

更に林芙美子の「尋常六年生の手紙」の批評に触れて「仲々乗気になつて批評してゐられる態度が見えて愉快である。」と評価し、「この批評材料は林氏の作家的立場から丁度恰好なものであるやうに考へる。それに比べて前の井伏氏にあゝいふ作品の批評は不向だつたのかも知れない。之は大変失礼な言ひ方のやうであるが、折角批評して貰ふのであるから、その人の作家的傾向にふさわしい作品を批評して貰つた方が我々に益するところが多いだらうと思ふのである。」と述べている。

確かに、そうした面もあつたのだと思われる。

滑川道夫著『日本作文綴方教育史3』（「調べる綴方の出発」）によると、「調べる綴方」は、昭和五年に、滑川が考現学にヒントを得て「課題作『歩く人の研究』の事前指導を行った」のがきっかけのようである。

しかし大正十四年七月には青野季吉の「調べた芸術」（『文芸戦線』）が書かれており、時代的な背景として影響を与えたことも考えられる。青野は、これまでの小説は「印象のつゞり合せ」であり、「身辺の雑印象に満足して、それを描いてさへおれはといふやうな、無意味的な、無尋求的なことでその『掘り下げ』得たものに時代意識が出る筈もないし、時代の苦悶が反映する筈もない」とする。したがって「現実を意力的に、尋求的に『調べて』行く行き方」、即ち「調べた芸術」が必要だといふのである。「科学的な調査」も含まれるという「調べた芸術」に井伏鱒二の文学が合うわけもなく、「かばん調べ」が感覚的に受け入れられなかったことは、充分考えられる。

その後、他の文人の批評の仕方を見ても納得の出来るものではなかつたらしく、井伏は昭和十年十一月の「月刊文章」でも「このころの小学生の綴方を募集して文壇人に批評させてゐる雑誌がある。

文壇人は職業的な態度でその綴方を批評してゐるが、その綴方を書いた幼い子供に影響するその批評の力は絶大であらう。空おそろしくて私などさういふ批評をする気持になり得ない。」（『工程』による）と述べている。

百田宗治によれば、この企画の目的は、教育界の人間とは違った視点からの批評を期待する」というだけではなく、「従来の狭益な教室的反響にとどまつた児童文といふものを、あらゆる機会にひろく一般社会の外気に触れさせ、それへの関心とか注意とかを一層積極的に喚起しようとする」（『文学者と綴方』第一巻第三号）とこゝろにあつた。

しかし作家の側からは「比較的高学年の児童文に対し、児童文らしいはゆる稚拙味の表出に乏しいとか、大人風の表現に走り過ぎるとかいふ不満が多く掲げられ」、百田宗治は「少なからぬ失望に近い気持」を抱かされた。百田は、「一口に児童と云つても、そこには七八歳の尋一生から十二三歳の高一二に及ぶ事実上の幾階程があり、彼等自身是等の諸階程のうちに、吾々の十年或は二十年にも匹敵する生活意欲上乃至は構成上の変化や或は進歩等を経験してゐるのであつて、その子どもたちの「夫々の層の実情に即して彼等の自己表白は味はれ、眺められなければならないのである」と言う。

そして、次のように文を結んでいる。

「私は今日の文学者のうちから、更に積極的に、自ら動いてこの児童生活の生きた細部に立入り、その文を通じて彼らの生ける真の姿を見出さうとする人々の一人も多く出て来ることを希望して止まぬのである。」

これは『工程』第一巻第三号での言葉であるから、百田宗治は、この企画を始めてほどなく失望感を味わされたことになる。百田は文学者たちにもっと子どもに関わるように促しているが、文学者

に「児童生活の生きた細部に立入」る気がないのであれば、井伏の言う通り、「職業的な批判を加へるのは遠慮すべきだ」ということにもなる。「かばん調べ」の教育的意図を理解出来なかつた井伏鱒二が批評に踏み込まなかつたのは、そういう意味では妥当な判断だと言えよう。

では、木村寿は教師として、この綴り方で何を指導しようとしていたのだろうか。

## 二、木村寿の「調べる綴方」教育論

木村寿は、『綴り方倶楽部』昭和八年九月の臨時増刊号に、「調べる綴方」に関する文話を書いている。小学生向けだけに、「調べる綴方」の考え方が要領よくまとめられている。

まず木村は、本から学ぶことだけが勉強なのではなく、むしろ自分たちの周囲にある色々な物から「考へもしないのに自然に育てられてゐる事の方が多い」のだと、周囲へ関心を持つ必要性について述べている。綴方は色々な見た物やした事を書くが、それは本以外のものに「勉強のもとを見出してゐる」のであり、「綴方の仕事はさういふ大切な役割を持つて、心を磨き澄ましていく」のだと言う。

また、勉強にも予習があるように綴方にも予習があり、「ある事象を書く前に、その事象について調べておく」ことが大事なのだと言ひ、その例として「蜘蛛の巣にたまつた露の美しさに心引かれて綴方を書く」場合を挙げている。従来の綴方は「その美しさを思ひ出す様にして書いて」いたが、「調べる綴方」は「思ひ出す様にして書く前に、その蜘蛛の巣について、美しさをもう一ぺん観察する」のだと言う。そうすると、見逃していた美しさが見えてくる。「自然の不思議、心に感じなかつたカガヤキをすらすら得」、「再び調べる心に立つて見直すと、只頭の中に残つてゐた事よりも以外なもので大

事なことが、見捨てられ感じ捨てられてゐる事を明白に知る」のだと言ふのである。調べることによつて新しい発見がある、それが「調べる綴方」なのだというわけである。

更に、綴方はただ人を感じさせるばかりではなく、「人も自分も力づけてゆくものでなければなりません」とも言つてゐる。綴方を書いた結果が、子どもの生活を良い方へと変えて行くものでなくてはならないというのである。その例として、二年生の男子が休み時間に全校生徒の遊びを調べて綴方を書いた結果、二年生全体の遊びがその後変わつてきたことを挙げてゐる。

この綴り方は、土々呂小学校尋常二年生の文集『ひかり』第十二号（昭和八年六月三日）に掲載されたものである。

うんどうばのあそび

尋二 吉井己義

けふはうんどうばに出て みんなのあそぶのを見てゐた。一年の女は なはとびをして びよんびよん とんで それが じやうずにとんでゐるうちに ひつかかるので、なはをもつてゐる一年の女は、なはをおいて とばせてやるのです。こゑもだします。

一年の男は 大きいせいとあそんで、あばれをして、大きいせいとが まけてやつて、一年の男はいばつてあばれます。大きいせいとがにげると おつかけていきます。

二年の男も やつぱりあばれます。大きいせいととあばれてゐます。みてゐると五年の男です。そして二年は ははしくやると 五年の人も ははしくやつて、ちちなげるやうにして 見せます。そうすると二年の男は ともだちを だんだんつれてきて、五年の人にむかつて 足をにぎつて たほして おさへつけて あばれてゐます。

かけご多をかけて はばしくおさへつけて、なかなか おきられないやうにします。土がいつべついても しりません。

二年の女は なはで、二人がりやう方にもつて、そのあひだを 一だん二だんと とんでゐると、男の子がきて そのなはを とろとしてもどかす。そうすると あちらへいつて又一だん二だんといつて とんでゐます。それに 男がついていくと、どんどんむかふにいつてしまひます。

男は人のあそぶのを じやましていけません。

(略)

こうと一年の人は 石だんにこしかけて、人があばれてゐるのに、石をなげて しらんふりをしてゐます。石のあたつた人は、ちよつとなせて又あばれます。それは私がおもふと こうと一年の人は ばかです。

こうと一年の女はなはとびです。ほんとにおも白さうです。こうとう二年の男は、しゆうばんで 竹をもつて 中にはに あそんでゐるのを うんどうばに出してゐます。

かせい(家政科)のせいとは、やつば一だん二だんをして 高くなると 高とびをして、うんどうばは、わあわああと こゑがします。こゑばかりで、だれが おらぶのか すこしも わかりません。ぼくがおもつてみると、女の子がもつてゐる なはをとつたりしてゐますが、おもふと、わるいあそびだとおもひます。それから男の子が 石を人になげて しらんふりをしてゐますが、けがしたらあぶないですから、ほんとに ばかだなあと おもひます。それから女の子が一だん二だんをして せつかくおも白くあそんでゐるのに、ないふできつて あそばせない男の子がゐます。せんせいから ないふはとめられてゐたり、ないふは 人を しや(あやまつて)きるからあぶないです。

私は、みんなのせいとがなかよくすれば、この学校は いい学校になります。

みんなが、女はなはとびをする、男はにはとりげんくわをする。そして人のじやまをせないと、わるいことや あぶないことは ありません。

それから二年の男は、大きなせいとと あばれやらするよりも、みんなではとりげんくわをしたり、ぢんやとりしたり、ぼうるけりをした方が、げんきがあつていいです。

一年から高等科まで、全校生徒の遊びを観察し、それについて批評を加え、自分の考えを述べている。この綴方によつて、後日、最後の「二年の男は、大きなせいとと あばれやらするよりも みんなではとりげんくわをしたり、ぢんやとりしたり、ぼうるけりをした方が、げんきがあつていいです」という提案通りに、二年生の遊びが変わつて行つたというのである。

調べる綴方は「事象を正しく観取り、正しく批評して書くことであり」、それが結果として人を動かし、生活を変えていく。

木村寿は文集の中の文話でも「学校は、みんなが心をそだてていくためには大せつなところだ。みなさんの一日のことをよくかんがへて見て下さい。学校にきて、本をならひ、さんじゆつをならつてかへる。これだけでは心をほんとうにそだてることはできないのです。じぶんしたことなどを、よくかんがへてみて、あれはわるいから あしたからやめやう、あのことはよかつた、あれはつづけていかう、ともだちのすることにたいしても、さうした心をはたらかせていくうちに、みなさんの心は、けふよりはあした、あしたよりはあさつて、だんだんよくなるのです。」と、学校の勉強だけでなく心を育てることの大切さを説いている。吉井己義の綴方にし

でも「吉井くんのは、とくに、一つ一つについて、じぶんの心をはたらかせて、よいわるい、ああしやう、とかんがへてゐることなどいいです。」と、観察した事について、低学年ながら考えを巡らしているところを評価している。ここに木村寿の「調べる綴方」の特徴がある。

「調べる綴方」が高学年向きであり、低学年には難しい面があることは容易に想像できる。しかし木村寿は「尋二調べる綴り方の実践」(『調べる綴方の理論と指導実践工作』)の中で、調べる綴り方が「低学年の子供にも低学年なりに可能であり、しかしてこの実践行動が子供の生活を深めるのに、重要な一つの地位を持つものであることを認めてもらひたいと思ふ。」と述べ、低学年にも十分可能であり、かつ子どもの生活に重要な働きをなす実践であることを主張しているのである。

木村は、調べるといふことは「学ぶ事、役立つ事でなければならぬ。随つて、二年は二年の子供に出来て、二年の子供に役立つもの、二年の子供の生活に関係あるものが、調べる綴り方の対象とならなければならぬ。」と言う。そして一年生の時の綴り方は「1、人事生活に関係あるもの。2、動物を観察したもの。3、植物を観察したもの。4、郷土生活を表したもの。5、家庭生活を表したもの。6、遊戯生活を表したもの。7、自然観察をしたもの」に分類されるとし、子どもたちの生活は「これらの対象から育てられてきた」のであるから、二年生では調べる綴方の対象をこれらに求めたいとしている。即ち、I、学校生活 II、郷土生活 III、自然現象 IV、動植物観察である。

学校生活を対象とした「調べる綴方」では、子どもたち(二年生)は、二学期までに次のようなものを調べている。

- 1、学用品の調査
  - a、自分の学用品及び持物
  - b、学級児の学用品及び持物
- 2、学級事件の調査
  - a、けんくわ調べ
  - b、ちこく調べ
  - c、びょうきを調べる
- 3、学校に於ける遊びの調査
  - a、男の子の遊び
  - b、女の子の遊び
- 4、学級をよくするために
  - a、さうじのよいわるい
  - b、べんきようについて

「学用品の調査」では、四つ切りの紙を生徒に与えて学用品を書かせ、その下買った所と値段を記入させている。それを互いに読み合う中で、子どもたちは雑記帳等の値段が店屋によつて異なることを発見していく。

- 1、店屋によつて同じ物でもねだんが異なる。
  - 2、同じねだんでも、物によいわるいがある。
- したがつて「雑記帳を買ふ時は、××の店、画用紙を買ふ時は△△の店」という結論になる。学用品調べは「良い物を、安い店で買う」という極めて実用的な役立ち方になっている。

「調べた綴り方の意義は、子供達が自分の社会生活を自認する事にある。そして一人の発見が他のものに及ぼして行くといふ実に行動は行動を示唆する力を生んでいくものである。」というのが、木村寿の考え方である。

木村は「子供の生活を正しく導いて行く原動力は学校生活にある」と考える。「学校生活の力によつて子供の生活内容を正しく深く助長して、すなほに生長させてやるのが、教育のねらひどころである」。しかるに実際は学校生活が子どもの生活に及ぼす力は微々たるものであり、その原因は「学校生活の全貌を正しく認識させる指導が欠

けてゐたから」だという。「学校生活を一つの子供の社会生活と観ながら、社会的な生活訓練を与へず、個人的な、主観的な訓練のみやつて来たから、生活力が培はれなかつたのだ」、その結果、「子供は只、与へられたものを与へられたままに、まるのみに生活の中に受け入れてゐたのだ」と言うのである。

木村は、それを具体的な例を以て説明している。

「も一度子供の毎日を見る。只道具を持つて学校に行つて学び帰つてくる。ただそれだけである。自分の持つてある学校道具そのものに対する正しい知識すら持たない。鉛筆が短くなれば只捨てるだけである。捨てれば父母から金を貰つて又買ふ。物のねうちもしらなければ、子供相当な経済的知識などは紙の如く希薄である。学校生活の事実が只批判もなく水の如く流されてゐる。実に坦々たるものである。学校を育てやうともせねければ、学校によつて育てられる何物をも自覚して居らない。」

したがつて木村寿は、学校生活の諸相を子供自身の手によつて調べさせ、知らせ、学校で起こつた色々な事件を、単なる記録ではなく、「事件そのものを正しい認識の中に見ていく実践行動を綴文行動に迄展開させること」が肝要だと考へるのである。受け身の生活の克服である。「学用品調べ」等は、この考へのもとに行われた実践である。

冒頭に記した「かばん調べ」も、こうした実践の延長線上にある。クラスの子どもたちがどんなカバンを持つてゐるか、それは誰がどこで買つてくれたのか、幾らしたのか等を調べるだけでなく、それに対する作者（吉井己義）の考へ方が終末部分で述べられることによつて、一つの学級の中に色々な「かばん」があるということがどういうことを意味するのか、学級全員が考えさせられることになる。「紙の如く希薄」な「子供相当な経済的知識」が覆させられるので

ある。ここに「かばん調べ」の教育的意義はあつた。文学者である井伏鱒二は、それを理解し得なかつたのである。また、「綴り方らしからぬ綴り方」に、感覚的に受け入れ難いものを感じたのである。

付記 本稿は「宮崎県児童詩教育史」の第九部をなすものである。

(二〇〇五年九月三十日受理)